

貴司山治「新段階における根本方針と分散的形態への方向転換」 (一九三四年・未発表原稿)

解説 伊藤 純

翻刻・注 池田 啓悟 鳥木 圭太

村田 裕和 安岡 健一
和田 崇

解説 貴司山治「新段階における根本方針と

分散的形態への方向転換」について

伊藤 純

この未発表原稿は「一九三四年／評論及び随筆」と毛筆で表題を記した板紙の表紙で綴じ込まれた原稿の綴りの中から見出された。(写真1)

但し、原稿といってもいわゆる原稿用紙の綴りではない。A5版よりやや大きい用箋(バラのノート用紙)約二百枚をパンチ穴でヒモ綴じした厚さ約三五ミリの冊子様のもので、これに、表裏両面にマス目によらずフリーに書き込まれている。(写真2)

この中には頭記の「新段階における根本方針と分散的形態への方向転換」(自筆原文と途中で中断している浄書稿)以外に「題材の発展」(現代文学講座七月号)「大阪にかえって」(進歩六月号)「我もし作者なりせば」(進歩八月号)「バルザックの宣伝」(時事新報七月二三日号)「文学指導の問題」(改造16巻11号)「政治と文学」(東京日日新聞九月二二日号)の浄書稿が綴じ込まれているが、これらはいずれも括弧内に注記したように、この年に

活字になっている。「新段階における」だけが未発表原稿である。

どういう意図でこのような綴じ込みが作られたのだろうか。実はこの時期には他にも「一九三三年評論及び随筆」「小説地下鉄」など、同じような板紙表紙の綴り込みが作られている。

その意図として第一には、そのほとんどが既発表原稿であることを考えると、雑誌社・出版社に渡してしまった原稿の手元控えを保存するという目的である。当時は雑誌社出版社は組み版済の原稿を作者に返すという習慣はなかった。

もう一つ重大な理由は、伏せ字の問題である。活字化された作品は発禁などの干渉を避けるために作者や編集者によって多数の伏せ字が設定されることが珍しくない。だから掲載誌を保存しても正確な原文の形は保存できない。真の原文は、コピー機などの無かった時代には、結局伏せ字設定前の原稿を筆写して手元に置いておくしかなかったのである。

所がその中で「新段階における」は未発表原稿であり、原文は自筆で、その上に更に多くの自筆の赤字修正が加えられている。つまり、この原稿は、他の既発表原稿が浄書稿であるのと異なり、作者自身が書き起こし推敲を加えたオリジナル原稿であろうと考えられる。

ではなぜこの原稿だけが未発表のままとなり、浄書も中断したまま放置されているのか。その事情は、原文稿の文末に記された「一九三四、一」という執筆時期から推察できる。

貴司はこの一九三四年一月三〇日に二回目の検挙を受け、三月二六日まで杉並警察署に拘留される。つまり、この原稿を書き終えた直後に拘留されたのである。しかもその拘留中の二月二二日、拘留中の貴司留守宅で開かれた作家同盟拡大中央委員会で同盟の解散が決定される。この論文で主張していたことが現実となり、留置場から出てきたときには作家同盟はなくなり、分散抵抗の時代になっていたのである。状況が論文を追い越して走り去ってしまった。

原稿が未発表のままになり、浄書も途中で放棄されたのは、そのような理由によるのではないかと考えられる。

(貴司山治長男・フリーライター)

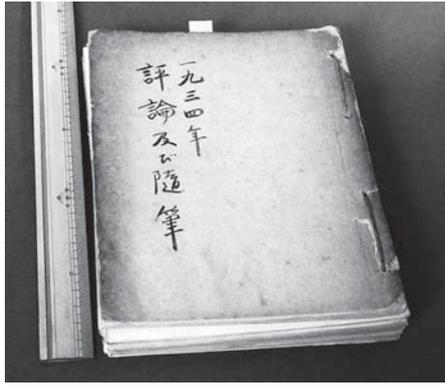


写真 1

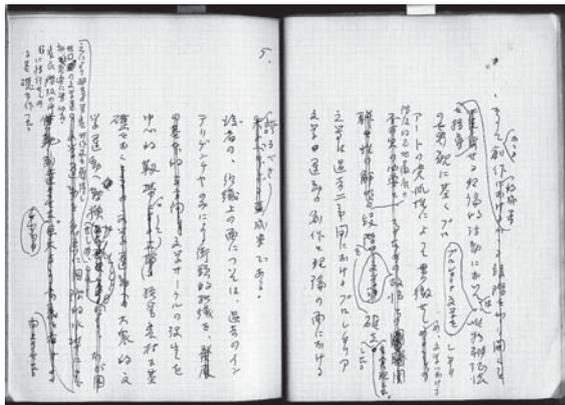


写真 2

解題

村田裕和

貴司山治(一八九九—一九七三/本名伊藤好市・徳島県鳴門生まれ)は、一九三三年の小林多喜二虐殺、翌三四年のナルプ解散と、プロレタリア文学・文化運動が解体・消滅の過程をたどるなかで、その最後の孤塁を守るように活動を続けたプロレタリア作家のひとりである。三五年には文学案内社を創立し、雑誌『文学案内』を創刊。活動の場を奪われたプロレタリア作家たちに貴重な発表舞台を提供した。

一九三一年のナップの解散とコップの成立は大きな転換点であった。従来の共産党中央部の指導による労働組合運動は、きびしい弾圧によって壊滅に近い打撃を受けていた。コップ結成のねらいは、工場や農村内に文学サークルや演劇サークルなど、さまざまな「文化サークル」を建設して、労働者や農民を獲得・組織することで、共産党の「外郭団体」としてその非合法政治運動を代補する役割が期待された。三三年には、貴司も地下鉄ストライキで解雇されたメンバーを集めて文学サークルを作り、ストライキの詳細などを取材し、のちに小説『地下鉄』を書いている(第三章までで中断)。ただしこれには、軍国化が進んだ時期に共産党指導で成功した希有のストライキの実態を記録するという作家的な意図も働いていたように思われる。

しかし、三三年に出獄した林房雄のジャーナリスト的な指導部批判、中野重治らナルプ中央委員のあいつぐ検挙、多喜二虐殺と、情勢は悪化を続けていった。治安維持法改正(注3参照)による外郭団体取締の方針は結果的に審議未了で廃案となるが、その威嚇効果は、コップ／ナルプ所属の作家たちを離散させるに十分な威力を発揮した。と同時に、林房雄の主張(注5、16参照)はますます真実味を帯びたものとして、共

鳴者を増していく。こうした複合的な危機を克服するために出されたのがこの「分散的形態への方向転換」論である。ここでの貴司の認識や判断は、基本的にはコップ／ナルプを維持・発展させるための「多数者獲得の政治的任務」という従来どおりの方針を受け継いでいる。しかしそれは、「文化サークル」のさらなる徹底によって、自律的な連帯の可能性へと方向付けられていた。これを多喜二や宮本顕治らの政治主義的「指導」に代わっていかに「統一」してゆくか、「七―三」で短く触れられているものの、明確な答えは出せていないように思われる。それは、情勢変化に応じて実践的に解決していくしかないということでもあっただろう。この原稿は、ナルプ解体前夜の困難と混乱の構造が集中的に現れたものとして、貴重な歴史的証言である。

「多数者獲得」の大義よりも、まず「大衆に読まれる文学」をその生涯のモチーフとして持ち続けた作家貴司山治を、戦前のプロレタリア文学運動（のナップ／コップの規範）だけでとらえることはできない。戦後の農村開拓やさまざまな文学活動とあわせて検証していく必要があるだろう。

なお、ナルプ解散時期に拘留（三四年一月三十日～三月二十六日）されていた貴司は、釈放の三月二十六日にきわめて長い日記を書いている。二十七日以降の分も含め、関西大学国文学会発行『国文学』（81、82、85、86号）に浦西和彦による翻刻がある。同氏解説とあわせて参照されたい。伊藤氏作成「貴司山治資料館」(<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/>)にも二十六日の日記全文や多くの資料が紹介されている。「日記」原物は現在徳島県立文学書道館に所蔵されている。

巻末の注は当時のプロレタリア文学運動の情勢に関する事項にしほった。各種辞典・事典のほか新日本出版社刊『プロレタリア文学資料集・年表』（日本プロレタリア文学集別巻、一九八八年）を参照した。また、伊藤氏解説にもあるとおり本原稿と同じ綴じ込みには、他筆による浄書稿が

存在する。浄書は完了しておらず、「七、分散的活動の形態・方法」の二行目「一、まづその方法についていへば、」までで終わっている（用紙途中で放棄された状態）。異同の多くは筆写ミスと思われるが、巻末にその主な異同を掲げた。

翻刻および注の作成は五名で分担したが、「一九三四年／評論及び随筆」全体の翻刻から始まった作業には貴司山治研究会の内藤由直、友田義行、禰美智章、雨宮幸明、泉谷瞬が参加している。諸氏の協力をここに記しおきたい。

「翻刻凡例」

- ・削除・挿入は反映させた形で再現する。傍点等は原文のまま。
- ・変体仮名・合字は現行通用の平仮名に改める。見出しの組み方や字下げは整理・統一した。
- ・原稿は綴りの八頁から一二〇頁に及ぶが、段落改め以外の改行は再現しない。
- ・明らかな誤字・脱字もしくは当て字と思われる箇所には「ママ」とふる。
- ・原注はない。翻刻者による注は「☆」、校注は「*」を用いて示し、末尾に掲げた。

新段階における根本方針と分散的形態への方向転換

- 一、運動停滞の原因
- 二、従来の達成点
- 三、プロレタリア文学運動のレーニン主義的原則の要点
- 四、従来の指導方針の欠陥
- 五、新たな段階の根本方針は何か
 - (イ) 創作方法の方針
 - (ロ) 文学理論の方針
 - (ハ) 文学サークルの方針
 - (ニ) 同伴者組織の方針
 - (ホ) 農民文学組織の方針
 - (ヘ) 作家のなすべき政治的・文化的アチプロの仕事の組織について
 - 六、治維法改悪の新情勢と分散的活動形態への転換の必要
 - 七、分散的活動の形態・方法
 - 八、結論——実践による敗北的危険の克服

一、運動停滞の原因

一九三三年において、プロレタリア文学運動は萎微停滞した。わが作家同盟は東京を中心として、全体として無活動状態に陥った。そして、このやうな停滞の枠内で雑多な混乱した見解が広汎に発生した。現在、それは創作理論と組織方針の二つの上に現はれてゐる。その特質は、わがプロレタリア文学運動が、十数年来の歴史の中で、築き上げて来た革命的成果を無視し、一方的に現在の外的状態に適応して無原則的退却を

企てるところの、敗北主義の理論とみなすことができる。
この危険は今日と雖も依然として克服されてゐない。
何故か？

それは敗北主義の理論が生み出されるところの根拠を正確に認識し、運動全体の萎微停滞を打破するための方針が未だ確立されてゐないからである。

では、現在の停滞は何から導き出されたか？

一、その主要なる外的条件は、プロレタリア文化運動に対する攻撃として治安維持法の「改正」案が議会で持出され、四月一日以後それが現実に実施されることが明かになつたための心理的反映として。

二、われわれの従来の運動方針に少からぬ欠陥が存在したがためである。二つの原因は相結んでゐる。第一の理由によつて、われわれの従来の方針の欠陥が急速に曝露してきたこと、又逆に、方針の欠陥が、外的条件の悪化を機とする敗北の流れに結集の動機を与へたこと。

われわれは運動全体を内部的に梗塞せしめてゐる敗北主義的諸傾向、諸理論を克服し、プロレタリア文学を更に前進せしめ、運動の内部により以上の成員を結集せしめるために、従来の方針に厳格、正鵠なる自己批判を加へることを日程に上し、そこから新しいより強化された方針をうち立て、之を外的条件に対応せしめ、急速に文学運動を活潑化し、拡大強化しなければならぬ。

二、従来の達成点

この二年間において、わがプロレタリア文学はその創作的理論的実践において、かつてない高いプロレタリア的段階に到達した。又その文学運動の組織において一層の達成を示した。

即ち前者において、われ／＼は革命的プロレタリアートの生活を題材とし、又その観点に立つて、当面の必要なる題材をとり上げてその作品を構成しブルジョア的、社会民主主義的作家の達しえざるプロレタリア文学の独自の優位の段階を切り開いた。

そしてかゝる創作的成果を指導せる理論的活動においては、プロレタリア文学を唯物弁証法の世界観に基づくプロレタリアートの党派性によつて貫徹せしめ、文学における階級的見地の徹底の段階を確立した。之等は過去二年間におけるプロレタリア文学運動の創作と理論の面における誇るべき成果である。

後者の、組織上の面については、過去のインテリゲンチヤのみによる街頭の組織☆を、文学サークルの設定を中心の輻帯として経営農村に基礎をおく大衆的文学運動へ転換せしめ、之により相当の労農新作家を獲得し我国の文学運動を急速に労働者・農民階級の中に移行せしめる基礎を作つた。

これらの、過去二年間の成果を今日もしわれ／＼が過少評価するやうなことがあるならば、プロレタリア文学の正しき発展の道はみ出しえないであらう。

三、プロレタリア文学運動のレーニン主義的原則の要点

以上のやうな発展が顕著にみえたのは、その時期についていへば、一九三一年後半より三二年前半期の間である。引きつゞく一九三二年後半期より三三年前半期にかけて、われ／＼の方針による文学運動の発展は停つた。そして一般的無活動状態が之に代つてゐる。

この時期の個々の現象を批判して、日和見主義的偏向を警告するならば、至つてたやすいことである。事実、この時期に、われ／＼はそのや

うな批判や警告に主力を注いできた。

にもかゝらず、一般的沈滞はすでに三三年前半期より、理論と創作の面に日和見主義的右翼的傾向の公然たる結集☆——へと進行し、三三年後半期に入つては、この現象は更に進んで、組織問題に及び、即ち運動を宗派的見解によつて、街頭のグループへ解消せんとする傾向となつて現はれ、運動内部における諸対立と、分裂的傾向を生み出した。

わが同盟の従来の方針は、この方針の側に立つて斗争する作家批評家の決して少くないのかゝらず、この時期を通じて依然として、之等の危険と、危険の増大——沈滞より、日和見主義的傾向へ、更に敗北的分裂的傾向への進行——に対する決定的克服の力とはならなかつた。

もしこの時期に、われ／＼が個々の現象を敗北の見解として批判し、警告するならば一層たやすいことである。これらの敗北的現象は誰れにもよくわかる姿によつてハッキリしてしまつたのだから。そして、事実われ／＼はこの時期に、そのやうな批判と警告に熱中したのである。

こゝでわかることは敗北的混乱に対するかゝる単純な斗争の方法は、それを克服する代りにむしろかゝる偏向に油を注ぐが如き結果となること、これである。右翼的偏向に対するかゝる単純な斗争の方法は何故に無力であつたか？

一言にしていへばかゝる方法は政治的幼稚性のゆえに——マルクス主義の側への多数者の結集といふプロレタリア階級の現在の階級的必要の基本的見地を、文学運動に生かすための原則的諸條件を適確に把握してゐないことによつて——無力とされる。

このことを批判して、今こゝで我々が把握されなければならないプロレタリア文学運動の根本的方針の要点は次の如くである。

一、資本主義の下においてはプロレタリア文学の自由なる発展は約束されておらないがその独自の實現は可能である。

二、そのために、革命的インテリゲンチヤは、労働者階級の中に、プロレタリア文学の影響を持ち込み、労働者の中から作家批評家を呼び醒し、之と結合して主体を形成しつゝ、一方ひろく農民及び進歩的インテリゲンチヤ・小ブルジョア中間層をこれに結合せしめ全体を革命的文学者の大衆団体として、之によつてブルジョア文学との斗争を組織しなければならぬ。

三、けだし、プロレタリア文学は決してブルジョア文学の全体的否定の上実現されるものではなく、それはブルジョア文学によつて達成された文学の本質を継承し、もはやその發展を押しとどめる桎梏となれるブルジョアイデオロギーとの斗争を通じてのみ成長するものであるからである。従つてプロレタリア文学運動においては進歩的ブルジョア文学者との協働や、進歩的インテリゲンチヤ中間諸層の文学的働き手をブルジョア文学との斗争に引き入れることによるプロレタリア化の方法が必要である。実にかような方法の遂行を通じてのみ、マルクス主義作家批評家の自己訓練、労働者、農民の中からの文学的幹部の覚醒が可能である。

四、かゝるプロレタリア文学斗争に外的困難の加はることはいふ迄もない。その際、運動内部の弱い部分が敵階級のイデオロギーを反映し、おくれたる、異なる階級諸層間の意見の衝突や対立が生れ、実践における左右両翼への偏向、特にその敗北的偏向の起る基礎を、われ／＼の時期においては、終局的に清算することはその団体構成の上から不可能なのである。

五、随つて、運動の内部における諸偏向との斗争が怠られていゝのではなく、常に根本的な、最も大仕掛けな斗争の方法が運動そのものを形態づけるやうに作られてゐなければならぬ。

即ち、常に諸偏向に対する、特にその主要偏向に対する、マルクス

主義作家批評家の中心となれる大衆的カンパニー^{*3}の組織が、多様な形において創設されること。之によつて、中心分子の不撓の抱容的な啓蒙活動が終息なく展開されつゝ、たえず変化し、加重する外的条件に対応して、組織の拡大と、目的の貫徹に有利な運動方針が与へられなくてはならない。

いやしくも、おくれたる・異なる階級層のすべての成員の全体としての積極的活動が阻害されるやうな方針や、指導の方法が与へられては正しくない。

所が偏向に対するわれ／＼の斗争の方法はさきに単純な斗争の方法と呼んだ如く、一九三三年度において、名目的批評乃至は裁断的批評ともいふべき幼稚なる方法を以て終始した。

名目的批評とは、偏向の事態をとらへて「これは日和見主義的偏向である」とか「これは敗北的傾向である」とかその他等々と名目づける範囲を以て終る批評をさす。かゝる批評は、それ／＼の意識段階にある作家の現在の偏向の性質を説明するのみで、それを克服しうる実践の契機を、その作家の現在の段階における観点に深く立入つて与へ得ないところから、作家を動かすことができない。のみならず一方にその作家が外的条件の圧迫を意識し、自己の内部にそれによる制約を意識してゐるかぎり多くの場合それは反撥をよびおこす。すると、反撥の事態に対しては「右翼的危険の増大」として、高度な政治的課題や世界観の規範を抽象的に標置して作家の到達点を否定してかゝる裁断的批評が出現する。けれども事態は更にそれによつて悪化するに相違ないために、この裁断的批評は、次ぎには声をからしての命令や、組織的処分^{ウツク}にうつたえての威赫^{ウツク}やの宗派的、官僚主義的段階をまきおこす。

われ／＼が単純な斗争の方法とよんだところのものはかくて全体を

おさまりのつかない事態に立至らせ、統一の代りに分裂を、前進の代りに停滞を持ち来してプロレタリアートの側への多数者の結集といふ階級的必要の前に、幼稚な誤れる方法たることが判明するのである。

四、従来の指導方針の欠陥

しかし、三三年度において「抬頭」したわれ／＼のかゝる単純な指導の方法は根本的には明らかに指導の方針の欠陥に胚胎してゐる。

では指導方針の欠陥は何処にあつたか？ それは主として次ぎの二つの点にあつた。

(一)「唯物弁証法的創作方法」のスローガンの欠陥。

(二)文学サークルと作家組織との関係の、機械的解決の欠陥。

この両者を通じて「政治と文学の関係の理論における一面性の欠陥」がその根柢をなしてゐる。

一、二年前の方向転換に際して、われ／＼はその組織の面においてはとにかく「多数者獲得」の階級的必要に結合して問題を具体的に解決することができた。

ところが、それと同時にそれまで採用されてゐたわれ／＼の創作上のスローガンたる「プロレタリアリズム」が「唯物弁証法的創作方法」のスローガンに改められた際にはこの階級的必要の見地をはなれて問題はたゞ純創作理論上の必要の如くにして解決された。随つてこの新スローガンに応じて提出されたいくつかの基本的課題——文学に対する政治の優位性、文学における党派性の確立、主題の積極性——これらは階級的必要の観点に向つて、作家を結集せしめる実践的意義を十分に実現しえなかつた。この、創作と組織の方針における分裂はわれ／＼が多数者獲得の政治的任務を、文学の上に具体的に解決

する方策を十分に明らかにしてゐなかつたことからきてゐる。

日本における「唯物弁証法的創作方法」のスローガンがかくの如く、当面の階級的必要と十分に、具体的に結びつけられることなくして採用された事実の中から二つの弱点が照らし出される。

第一、もしわれ／＼がこのスローガンの採用を「多数者獲得」の実践的モメントにおいてとり上げてゐたならば、このスローガンの持つ狭隘性不妥当性が逸早く批判されえたらうといふこと。さうでなかつたがために、このスローガンを設定した以後の指導の破綻・行詰りが予め用意されたこと。随つて「唯物弁証法的創作方法」のスローガンの採用においては、われ／＼は非実践的立場に陥つてゐたこと。

第二、だからわれ／＼は唯物弁証法といふ思惟の方法を、形象の方法に直接、不妥当に結びつけたものとしての「唯物弁証法的創作方法」なるスローガンの誤謬をこれによる実践を通じてすら容易に明かにすることをえず、そのために「党派性の確立」「主題の積極性」の具体化、及び政治と文学の正しい関係を説明することをえず、逆にその機械的な理解に陥つて、徒らに高い世界観の規範の押しつけや、高度な又は卑俗な政治的要求による作家の支配を企てて、成員の背離と混乱の状態をひき出し、却つて「多数者獲得」の政治的任務からすら遠ざかつたこと。

これらのことが今日の敗北の流れを運動の内部から助長した大きな原因であることを見落してはならない。

「唯物弁証法的創作方法」は文学・芸術運動の国際的スローガンであつた、めに、ソウエート文学においてもほゞ軌を一にした指導の行詰りに逢着し今やその自己批判からかきこでは「社会主義リアリズム」への発展的方向転換の途上にある。ソウエート文学のこの新段階に照らし出されて、わがプロレタリア文学運動も従来の行詰と混迷を脱し急

速に方向転換をなしうる時期に到達してゐる。

これに先立つてすでに優秀なる一部の作家は旧来の「唯物弁証法的創作方法」のスローガンの狭隘性と其の矛盾とを、実践的に解決して飛躍的にすぐれた成果を示しつゝあるとはいへ、文学運動を全体として充揚せしめえない誤謬をはらむこのスローガンは、「多数者獲得」の階級的必要に即したる実践的立場に基いて、揚棄されなければならぬであらう。

二、さきに、われ／＼は二年前の方向転換に際し、その組織の面においては、かく、「多数者獲得」の階級的必要に結合して問題を解決した、といった。

即ちわれ／＼はそのために「文学サークル」の創設を提唱し、これが文学運動を経営農村に結びつけて行くベルトであるといふことを明かにした。このことは全く正しかつた。けれども、その際にもわれ／＼は文学サークルの任務を、単に政治主義的に理解した結果、之を正しく旺盛化しえなかつた。

文学サークルは政治的見地からみるならば、その政治的・経済的組織のための補助組織とみることは正当である。そのためには、プロレタリアートの組織者は、文学サークルを全面的に指導しなければならぬ。即ち文学サークル自体として旺盛化さなければならぬ。そのためにはサークルの内部にマルクス主義作家・批評家を送りこみ、之をその力量に応じて活動させるように指導しなければならぬ。サークル内における作家の正しき活動とはサークルの成員が文化主義的偏向に陥ることのないやうに仕向けること、工場内の日常の問題から身をかはして「文学」に耽溺するやうな傾向をサークルの成員に保持させてしまふやうなことがあつては、又そのやうな傾向との斗争を組織しないであつては、そのサークルからまじめなプロレタリア文学の討

論も、創作の契機も見出せなくなり、随つてその作家がサークルの生活の中から自己の文学を形成することも、労働者の中から芸術家を呼び醒すことも不可能になることを十分に理解して活動することである。サークルの全面的指導に任ずるプロレタリアートの組織者はサークル内におけるプロレタリア文学のまじめな方法による斗争の遂行が、たゞにプロレタリア文学の結実のために必要たるのみならず、組合や党の斗争にとつても不可欠である所以を指針とするであらう。こゝに政治に対する文学の有機的関聯が存在し文学サークルがその補助的組織たる所以が存在する。

しかるに、われ／＼は実際において、文学サークルの、文学的特殊的任務の内容に関する具体的解明から、政治的任務を明らかにしようとはせず、直線的に政治的任務に従属してサークルを作れ、といふことを命令した。おくれたる・異なる階級の諸層を結合する文学団体のすべての成員に、一様に党・組合の補助組織を作るオルグの任務が課される時、こゝでも、それ／＼の成員の志向や、意識の段階に即しながらそこからプロレタリア階級の階級的必要に協力し、之を通じて成員自身の発展をさがなひとる実践の契機は一様に無視されて、単純な命令が之に代ることになる。

われ／＼はプロレタリア階級の政治的任務に耐えうるやうな作家を、おくれたる段階の成員に、実践の契機を与へて発展せしめることによつて、育成しなければならぬ。それはプロレタリア文学への欲求を中心としてかれ自身の内部に自己のおくれたる要素に対する斗争が行はれ自発的にかゝる任務の列に迄前進してきた上でなければ不可能である。即ちこゝでも問題は命令でなくて、そのための啓蒙と誘掖である。

もしこの啓蒙に成功することなく、或はこの啓蒙を度外視して、然

も政治的必要な一面からのみサークルのオルグとしての、任務を強制するならば、忽ち成員の恐慌、と、拒否、と、混乱、而して逃散とが起つてくるだらう。

その時になつてこの現象を、日和見主義的、敗北的偏向なりとしてきびしく批判しても、恐らく問題は解決しないであらうし、現にしなければならぬのである。

方法としての機械主義、思想としての政治主義的一面性が、方針の遂行をかくの如く不十分にしてゐる。

之とは別に、「唯物弁証法的創作方法」のスローガンの下で、政治的優位性といふ問題が提出され、そこでの、政治と文学の關係の具体的究明が尚かつ不十分であつたところから、それは政治による文学の功利的支配といふ偏向を、サークルの任務の認識に際して生み出す理論的背景となつた。

政治主義的一面性の誤謬は、文学サークルをベルトとするプロレタリア文学の基本的方向への發展をさまざまに、作家及び労働者・農民・インテリゲンチヤをプロレタリアートの側に結集することをさまざまに点において、之を政治的見地からしても、欠陥として批判されなければならぬのである。

先きのべた偏向との斗争における単純な方法としての名目的裁断的批評が之等の方針の欠陥を反映してゐることはいふまでもない。

以上の諸点が、過去二年間のわれわれの方針が、文学運動に対するその巨大なる寄与を果たしつつ、も常にその内部にあつてより以上の發展をさまざまにきたところの欠陥である。今は之を遠慮なく大衆の前に引き出し、新たな段階のために、最終的に克服しなければならぬ時期である。

五、新たな段階の根本方針は何か

以上の、欠陥の自己批判によつて、新たに立てられねばならぬ根本方針は何か？

(イ) 創作方法の方針

創作方法上のスローガンとして狭隘にして不妥当なる「唯物弁証法的創作方法」が改められ、プロレタリアートの側に結集しその勝利のために協力せんとするそれらの作家の、それらの段階における積極的メントを支持し誘發して絶えず作家に実践の契機を与へて行くところの任務を要約せる適當なるスローガンが新たに採用されねばならない。即ちそのスローガンには「多数者獲得」の階級的必要が、特殊に、文学運動の領域において、プロレタリアートの側へのより多くの作家・文学者を結集せしめる力あるものでなければならぬ。

(ロ) 文学理論の方針

文学理論の上では文学における党派性の確立が、主題の積極性ととの可分離の關係において真のリアリズムを創造する基本的な道であること、の確固たる理論が体系的に打ち立てられなければならぬ。

多くの作家文学者を、プロレタリアートの側に結集するといふことは、いひかへればその作家の内部に、党派性（正しき階級的見地）を鞏固にすること、それらの作家の創造物の中における正しき世界観の完成を指導し、扶けることに外ならない。その文学的指導の方法として「主題の積極性」の意義が、エンゲルスのいふ現実のマルクス主義的把握の方法としての正しいリアリズムの方法（エンゲルスのハークネスにあてた手紙^{☆13}参照）に一致することを理論的に体系的に明かにしなければならぬ。

(八) 文学サークルの方針

一、文学サークルの創設が、今後のプロレタリア文学発展の大なる舞台とならねばならぬことの全面的理解を打ち立てること。

二、文学サークルと文学運動の關係に關する従来の機械主義的欠陥(第四章第二項にのべた)を批判してその關係を正しく設定すること。まづ文学サークルと作家の關係については大約左の如くいへる。

(一) 現実の最も中心的な部分を把握することが最も正しいリアリズムの方法であり、このマルクス主義的リアリズムの方法によつて、現実の客觀的眞實をより正しく、妥當に表現しようとするところの創作的活動を通じ、正しい世界觀を把握するに至る作家の基本的實踐の形態として経営・農村内に作家・批評家自身がその力量に應じて文学サークルを組織することは欠くべからざる必要である。何故なればわれわれの眼前における現実の中心的部分とは生産を中心として資本家地主階級と労働者農民階級の対立してゐる経営内及農村内の生活であり、われわれはマルクス主義的リアリズムの立場から、特にその経営農村内の生活の積極的部分を主要題材としてとり上げなければならぬからであり、そのためには、具体的に経営農村内の生活を知り、之に参加しなければならず、その方法として——いひかへれば、すぐれたるプロレタリア文学及び農民文学を創り出すための方法として、文学サークルの創設の大なる意義が存在するからである。

(二) 同時に文学サークルの内部でのかゝる正しい活動を通じて、労働者及び農民の中から、藝術家をよび醒さなければならぬ。文学サークルはプロレタリアを労働者階級の中に移し植ゑ、文学における労働者幹部を養成するためのなくてはならぬ組織である。

(三) 以上の理解に際して勿論文学サークルはその成員の自主的組織であるといふ点を忘れてはならない。しかし、自主的組織であるといふことは、文学サークルが作家同盟乃至はプロレタリア作家・文学者の上記の文学的目的と無關係の組織であるといふことをいさかも意味しはしない。^{*10}常に自主的に組織されるといふことは、いひかえると、労働者・農民自身の文学的文化的欲求の充足のための、自主的目的を文学サークルが有するといふことである。故にサークルはわれわれに無關係に現在でも至るところの工場内・農村その他に自然發生的に自主的に生れてゐる。われわれは之をプロレタリア文学・文化の目的の下に統合しなければならぬ。又われわれはそのために、未だ生れてゐない所にサークルを組織するのである。両方の場合とも本来の自主的目的たるその成員の文学的文化的欲求の充足を図るやうにわれわれは活動しなければならぬ。そうでなければサークルの正しい發展、プロレタリア文学・文化の目的への結合の契機——は導きえなくなるのである。

x

以上は文学サークルと作家乃至文学運動との關係であるが文学サークルは一方階級の政治的見地から、その補助的組織として必要なのである。このことはサークルが前記の文学的性質を持つ外に、政治的經濟的性質を持つ——いひかへるとその成員たる労働者の生活の全体的向上の目的を持つことを意味する。故に基本的にはサークルの組織者・指導者は党乃至組合でなければならない。作家は之れに従属して活動するものであつて、ある場合作家自身が全体的オルグの役目を果たし、又は果たしようよう成長しなければならぬが、サークルの組織者たるべき任務が文学団体の成員の義務として規定づけられることは妥當を欠いてゐる。従来われわれはさういふ風にしてきたのであるが、それはあく迄も作家の任

務の發展、作家自身の階級的成長のための方針上の問題として取扱はないと正しくない。たゞこゝでわれわれが自己批判しておかなければならぬのは、文学サークルを政治主義的に理解して、サークルの成員、及びオルグたる個々の作家に、労働組合員、乃至黨員的任務を一面的に強制した従来の機械主義に反発して最近にわが同盟はサークルの意義を二分してその文学的必要と政治的經濟的必要に分け、サークルにおける作家の任務をその前者に局限し、後者の任務を、組合乃至黨の任務とし、作家たるオルグがその力量に応じてサークル内で政治的經濟的任務を兼ね果たしてよろしいといふ風に提唱した。

これでは政治主義的機械主義に対する文化主義的機械主義ともいふべき偏向を犯したことになるをええない。

作家が一つの工場内にサークルを作り、或は成員・講師として所属しそこでの活動の經驗をプロレタリア文学に創造せんとする場合、作家はそのサークル内でできるだけすぐれた積極的活動をなし、よき經驗を産み出さなければ、すぐれた作品を作り出すことも亦できない。

そのためには作家は、サークル成員の生活の積極的結合を高めるやうに活動するであらう。必然にそれは搾取との斗争に対する労働者の團結^{*13}となつてあらはれる。

作家は労働者の文学的・文化的欲求の充足の立場からかゝる結合の仕事に成功しうるし、又その經驗はたしかに文学の題材たりうる。

その際盛り上つてきた斗争を指導するものは正常的には勿論組合であり、党であるだらう。

しかるにその労働者の中にかゝる組織の未だない場合、或は弱まつてゐて力のない場合が現実にはたえずある。

かかる際にオルグたる作家がそれこそ自己の「力量に応じて」労働者の斗争の先頭に立ち、サークル自身が全工場を中心となつて斗争を遂行

することはまことに正しい。

もし作家がサークルの生活を通じてそこまで、労働者の生活を激発することに成功したならば、かゝる經驗はその作家に、立派なプロレタリア文学を創造せしめることの基礎とならないだらうか？ 勿論それはその作家以外の誰れにも書けない生きた題材である。勿論、作家はその外にきいたり、しらべたりしてあらゆる題材を描くことができるが、直接經驗は、更にそれよりもすぐれた創造の基礎である。

即ち文学的目的のみについていても、作家のサークル内で本来持つてゐる任務は、いはゆる政治的經濟任務を含む全体的任務であるといふことがわかるのである。いひかへればサークル内の作家はサークルに集る労働者の生活の全体的向上を図る任務を自から遂行しうる所まで自己の任務を開拓しなければならぬわけである。

もしこのことを図式的に文学的意義と、政治經濟的意義とに二分し、作家には、サークルに集る労働者の生活の向上のための、一部分（文学的（？））しか世話を焼いてはいけなしいといふ方針を立てるならば（任務を図式的に分けて考へることは、さふいつてゐることになるのである）それは折角サークルへ行く作家に対しては文学創造の無限的發展の可能な実践的基礎を与へないことに当り、労働者に対しては、その生活の向上を全体的に文学団体が支持しないといふ立前に立つことになるのである。

そこに欠けてゐるものは、文学サークル内での作家の活動は本来的には、その文学的目的に即して、サークル成員の生活のプロレタリア的結合と向上のための全般的任務を有するといふ正鵠なる認識である。たゞ作家がサークルの全体的組織者として活動する所まで發展した時、その活動は直接文学上の活動の範囲を超えて發展してゐることが明かであり、そこからわかるやうに、文学団体が作家にサークルのオルグ（全体的責任者）たれといふ規定を設けることは、さまざまの程度の革命作家団体

たる文学組織にあつては、それは明かに一つの強制となること——これである。

もし「政治」主義的にこの点を誤つて折角サークルへ行つた未だ幼稚な作家に対してサークル活動におけるその文学上の目的の実現の過程を懇切に指導することなく、それを無視して、サークルが補助組織たる性質を持つことの一面性だけをぬき出して、機械的にいきなり高度な任務を強要したとする！

文化主義者がこれとは逆にサークル内部における任務を折角サークルへ行つた未だ幼稚な作家に向つて制限し、その文学創造のための実践の中において作家が自由なる発展をとげることをさへぎつたとする！作家に対する不合理の強要といふ点では両者は一致するのだ。

われ／＼は作家に対してどんな意味合ひの強要を企てても失敗するであらう。

文学サークルの場合、われ／＼は作家がそのまじめな文学的実践の発展次第ではそこにおいて本来担当しなければならぬ任務の全体(文学的任務のまじめな遂行が経済的政治的任務の遂行にまで一致するところの)を明かにし、之に向つて自己を發展せしめて行くための、実践的モメントを常に与へつゝ、作家を高めて行くように仕向けることを方針としなければならぬ。

そして文学団体としての規定の上では「よき作品を創り出すためには経営農村の生活の中へ」或はそのためには「文学サークルへ参加せよ」といつた文学的モメントの範囲において適当なスローガンを定めることが必要である。

(二) 同伴者組織の方針

経営内文学サークルの創設はプロレタリア文学を労働者階級の内部に

移し入れ、インテリゲンチヤ作家をプロレタリア化し、労働者作家幹部を呼び醒すための基本的政策である。

同時に急進的インテリゲンチヤ、勤労者諸層の間に文学サークルが創設されこれをプロレタリア文学の影響下に結合し、こゝからプロレタリア文学の働き手を育成することが必要である。とりわけ資本主義の今日の段階におけるインテリゲンチヤ、小ブルジョア勤労者諸層の急進化は異常なテンポで進んでおり之をプロレタリア文学の下に、特にブルジョア文学との斗争を組織する任務の下に結集することは不可欠に重要である。こゝでは文学サークルの組織の外に、進歩的作家との懇談会、大衆的座談会、講習会、研究会、その他文化的文学的契機による統一戦線のカンパニーの各種の組織がたえず多面に創設されその中におけるプロレタリア作家、文学者の創意性ある活動が展開されそのヘゲモニーが樹てられなければならない。

(ホ) 農民文学の組織の方針

われ／＼は一と口に文学サークルを工場農村に作るといふことをよくいふが、工場内の労働者のサークル、及びインテリゲンチヤ、勤労者のサークルがプロレタリア文学の目的に結合されるように作られねばならぬのとは反して、農村内のサークルは農村プロレタリアート、貧農を中心に、中農を包含してこれらの階級的要求を通しての文学的文化的欲求の充足を契機として作られ農民階級の文学、農民の階級的要求の反映せる農民文学の發展の目的にひろく結合されねばならぬ。

日本における革命的農民の文学は、プロレタリア文学に比して著しくその發達がおかれてゐる。地主及び資本主義に対する農民の斗争を、プロレタリア階級に結合することは、プロレタリアートの歴史的任務である。このことがもしプロレタリア文学の任務に反映しないならば正しく

ない。

われ／＼は以前に農民文学はプロレタリア文学の一種類であると唱えたことがある。^{☆14}この誤りは思想的には是正されたが、プロレタリア文学運動それ自身が、農民階級の間で農民文学を亢揚せしめる任務を有することが、組織方針の上で十分に解決されてはゐなかつた。

実に農民文学はプロレタリア文学の直接の組織的指導なくしては発展しえない。

プロレタリア作家は、農村内での活動の形態を創設しなければならぬ。その中で農民階級の文学の結実のために、農民作家の養成のために、これらの作家がプロレタリアートの立場に思想的に実践的に発展してくるように指導的に活動しなければならぬのである。

この仕事のためにわれ／＼は農民文学の雑誌・出版物の刊行、それへの通信員の組織、進歩的農民作家の引き入れ、そのための各種の協働の形態、農村巡回座談会、研究会、講習会、文庫の創設等をサークルの仕事を中心として実現しなければならぬ。

そしてかゝる活動を通じて獲得した多くの農民作家をわれ／＼の団体に参加させなければならない。

(ハ) 作家のなすべき政治的文化的アヂ・プロの仕事の組織について

われ／＼過去においてプロレタリア作家がその文学的技術を動員すべき広汎なる政治的文化的アヂ・プロの仕事の領域に大なる任務を有することを、解決してゐない。

これの任務がかつて一部の同志によつて誤つて大衆文学の提唱として何度か持出され、その都度、誤謬が批判されて終つてゐる。^{☆15}最近にも指導的同志の見解の中にすら、この任務が、政治による文学の功利的支配

の批判に混同されて抹殺されてゐる傾きすらある。

作家が、政治的文化的直接的アヂプロの仕事に従事するといふことは、われ／＼が「戦旗」の経験を通じて体得してゐるやうに、極めて重要なことである。その重要性には少くとも二つの意義がある。

第一にはこれによつて、大衆を階級的に啓蒙し、正しい世界観へ引きよせることによつて「多数者獲得」の階級的必要の任務に照応しうる。

第二に、作家自身これによつて大衆の動向を知ることができ大衆の中から文学の働き手を引き出すことができ、又、この仕事が自己訓練となつてかれの内部における正しい世界観の完成を助ける。

従つてプロレタリア作家はこのための仕事を組織しなければならぬ。(具体的條項は次章「七」の第三項に挙げておいた。)

六、治維法改悪の新状勢と分散的活動形態への轉換の必要

大体以上が従来の方針の欠陥を自己批判したる上に立つ新しい活動の方針とするところのものとそれの組織形態である。

われ／＼はかくの如く正しく活動して従来成案のより一層の強化発展を斗ひとつて行かねばならない。そのためには之等の新しい方針による活動を、当面運動を硬塞させてゐる日和見主義的敗北的偏向の克服に集中しなければならぬ。けだしこれなくしてわれ／＼の顕著な前進はありえないからである。

けれども冒頭にわれ／＼がみてきた如く今日の日和見主義的敗北的偏向は治維法改悪後の外的條件の一層の悪化の情勢に対してあらはれてゐるのであるが故に、われ／＼の新段階における新しく強化された方針を、この外的条件に適當に対応して実践する形態を示さなければ、内部

的危機の克服は不可能であらう。

治安維持法の今次の改悪が文学運動を従来よりも困難な状態に陥れるであらうことは看取できることである。けれども一部の同志の如くこの困難が今卒然として起つたかの如く恐怖することは当つてゐない。かゝる観点からは唯無原則的退却の理論が生まれるばかりである。

敵が何故にわれ／＼を攻撃するかといふことはわれ／＼の文学運動がその真实性の故に敵に対して力を持つておるといふこと、又敵の経済的機構の破滅的行詰りがそのイデオロギーの上部構造に反映して文化的にも破産の状態に瀕して極めて無力化しもはやその文化的勢力を以て対抗することが不可能となつたがために暴力的に政治的に攻撃すること——即ち今次の治安維持法の改悪はその政治的攻撃のあらはれに外ならない。

之に対してわれ／＼はその文化・文学の優位せる方針の上においては何等かれらに譲る所はないのである。否、益々方針を強固にし、方法を豊富にして発展をあがなひとらねばならぬ。

そのためにはプロレタリアートが未だ勝利せざる国におけるプロレタリア文化、文学の運動は、その敵の暴力的政治的攻撃に対し、常に多様な形態の創設によつて対応しつつ、運動を發展させて行かなければならない。

治維法改悪案の骨子は「党と直接の連絡を有する団体の成員」を治維法によつて迫害しようといふにある。

所でわが作家同盟は、すべての成員によるプロレタリア文化文学の形成のための、労働者、農民の文化的欲求の充足のための、自主的大衆的団体であり、何等政党的目的のための団体ではないのである。

すべての成員はわれ／＼の目的方針を強く前面に押し出し、わが同盟の性質を明らかにすることにより敵の威嚇と飽迄も斗争しなければなら

ぬ。

けれどもわれ／＼の文学運動が、支配階級の反動文学・文化と優勢に斗争するかぎり、敵の実質的攻撃が息むといふことは予想されえない。

ことにそのための改悪治維法実施期の来る四月一日（想定）以後の社会的情勢は従来よりもわれ／＼の運動にとつて困難を増すであらうことは想像に難くない。もし之に対してわれ／＼が何等対応策を講じないならばそのことが必ず運動の發展の障碍となるであらう。

われ／＼は外的条件の悪化する転換期に当り、困難を克服する最も有利なる方法として、同盟の全国的集中的組織の合法性をどこ迄も守りながら、その仕事と活動はすべて分散的に展開するやうに方法をかへて行かなければならないといふことを提唱するものである。

このことが、今後の運動の成果をあげて行く上に一番有効であると考へてゐることはいふ迄もない。

けれどもわれ／＼の文化運動の領域内には、今後の活動の分散的展開といふことを、あやまつて、いくつかの傾向を同じくするグループへの分裂として提出してゐる同志もある。或は自由主義的な水準の新興作家団に再組織すべしといふ意見等々。

之等の意見に共通せるものはわれ／＼の団体がプロレタリア階級の文学建設の事業にかゝつてゐることを無視してゐる点である。

傾向を同じくするグループへの分裂論は、プロレタリア文学の基本的方針・方法とは無関係に形式を考へ出してゐる。

かくては分散的活動によるプロレタリア文学の統一的发展といふ見地をはなれ、単に傾向を同じくする作家・批評家の宗派的グループの結成といふことになるが故に正しくないのである。

自由主義的作家団への再編成論は、プロレタリア文学がその優位性において急進的、自由主義的同伴者^{☆17}をその周囲に結集しかれらるる高めるも

のであることを正しく理解してゐないところから、逆にその水準へ下つて行くことによつてはプロレタリア文学の大衆的發展が期しえられなくなることに盲目である。

同盟の目的性質を守りつつ、外的条件の悪化に対応して仕事の分散化を図るといふことは之等の考へとは一見似てゐるやうで共通してはゐないのである。

むしろ従来の組織上の發展による同盟の大衆化にもかゝらず、理論上の政治主義的宗派主義がたゞ單純に活動の中央集中主義をとり、ためにその機関に全体的意思を反映せしめえなくなり、民主性を喪失して行つた行詰りの欠陥を打破して外的条件に対応するためにも、今やわれわれは分散的活動に移らなければならないのである。

次にその形態と方法をかゝげる。

七、分散的活動の形態・方法

われわれはいかにして分散的活動形態を創設して行くか？

一、まづその方法についていへば、

(一) 同盟中央部・支部・地区は直ちに自主的に次項「二」におけるやうな仕事を開始すること。

(二) そのために成員を点検し、適当に地区に配属編成し、地区毎にその特殊性に応じて仕事を創り出し、成員はその仕事を中心として結集・活動する。

(三) 有力な班を有する地区ではその班に班中心の仕事を創設させ、班成員をそこに集中活動せしめること。

(四) 各支部及び中央部は、一単位となつて、独自の仕事を創り出すこと。

(五) 右の組織的關係とは別に、個々の同盟員のグループを以て、独自に仕事を創り出すことも必要である。

二、ではそれらの分散せる各隊列においてはいかなる仕事を創り出すべきか？

勿論、それは如上に述べられた新段階の方針の遂行のための仕事である。故に中央部・支部・地区・班におけるどのグループでも最も基本的な方針たる経営内文学サークルの創設や、農民文学、同伴者的・政治的・文化的啓蒙の仕事等がそれらの特殊性に応じて最も重要にとり上げられなければならない。

即ち

(一) その地方の労働者と協働して、サークル、研究会、懇話会等を作り、創作活動を起し、そのために、雑誌、創作集等の出版物を作ること。

(二) 農村においてはさきに農民文学の方針においてのべたやうなサークル、研究会、座談会、巡回講演、文庫等を創設し創作集、機関雑誌などの刊行を企てること。

(三) 同伴者的作家等との懇話会、それらをふくめた研究会の創設による出版物の刊行、サークルの創設。

(四) 作家の政治的アチプロの任務の実現のためには、文化聯盟の「働く人」「大衆の友」が之等の分散せる中央、支部、地区でその特殊の必要性に結合して復活されて行くことが必要である。勿論これらの雑誌名がそのまま、使用される必要は必ずしもない。又必ずしも活版刷りによる必要もない。雑誌の形態以外、何々文庫、或はパンフレット、リーフレット、単行本等いかなる形でもよい。定期的に出すか、臨時に或はカンパを目標に出すか、何れの方法をとるもよい。文学の仕事は独自の配付網を持ち、十分に合法的に行はれつゝ、われ

く、前期の文学運動の仕事の開拓ともなるやう、その読者が各種研究会、座談会等に組織され或はサークルになるやうに仕向けられなければならない。外に科学同盟、戦斗的無神論者同盟、消費組合、労農救援会、医療同盟、無産者託児所等々への協働による適当なる文学活動形態の創設、進歩的ブルジョア出版の編輯への積極的参加、自由主義的各種団体内での協同的文学活動等々に同盟員の精力が注がなければならない。

三、では、それらの分散的活動の統一はどうすべきか？

従来の方針における欠陥のやうに、統一ということを一化と取り違へないやうにしなければならない。

勿論それらの活動の統一はそれが同盟の方針と組織に沿つて展開されてゐるかぎり新しい問題はない。それらの統一指導のために、中央、支部の機関誌、ニュース等の刊行が現在の時期に於て特に復旧させなければならぬ。万一、統一の問題の上に新しい方法がとられなければならぬ客観的條件が生じた際には、前期の如く展開された仕事における代表者の定期的臨時的協議による統一指導がはからなければならないであらう。

その際においても、現在われ／＼が最も当面主力を注いで鞏固にしなければならぬ所のは、新方針の実践による分散的形態の基礎を固めるといふことである。この基礎をかため、今から成果を築き上げて行くことなしには、その統一の問題も恐らく空文に期するであらう。

八、結論——敗北的危険の克服

こゝに問題を概括して結論しよう。

一、プロレタリア文学運動の発展を現在全面的に梗塞してゐるものは日和見主義的敗北的偏向である。之が運動にとつての今日の主要危険である。われ／＼は之を克服して運動を前進させなければならない。

二、日和見主義的敗北的偏向は、治維法改悪による状態の悪化の気配によつてまき起されてゐる以外、従来の方針の欠陥によつて助長されてゐる。

故に之が克服のためには、方針の欠陥を批判し、より強固にされた根本的方針を示すと共に、一方治維法改悪によつて悪化する情勢の中における新しき有効なる活動形態が合せ示されなければならない。

三、従来の方針の欠陥は主として政治主義的機械主義ともいふべき要素にあつた。この要素がわざわひして方針のあらゆる方面に運動の停滞をまきおこし、特に成員の日和見的敗北的傾向を激成した。

われ／＼はかゝる政治主義的機械主義的欠陥を批判して、創作組織その他の全面の主要問題に対して、政治と文学の正しい関係を設定し、文学の特殊の結実のための方針を明らかにした。その中では特にわれ／＼は文学・文化運動におけるレーニン主義的原則を、多数者獲得の階級的必要に結びつけて実践の基礎を明らかにした。

四、治維法改悪の新情勢の中でのこの方針の実現のために、われ／＼は全プロレタリア作家、文学者の、わが同盟の現在の組織を基礎とする全国的分散的活動形態への方向転換の必要を強調した。

われ／＼はそのための方法と形態を明らかにした。以上が全体の概括である。

われ／＼はかくの如く方針を基礎づけると共に、新しい活動・新しい段階の事業の実現のために直ちに実行に着手しなければならない。

運動を梗塞させてゐる日和見主義的敗北的偏向は、めい／＼が、この方針の実行に着手する瞬間から打破されて行く。

ある二三の人々が日和見主義的敗北的偏向者で、他の二三の人々が政治主義的宗派主義者で、この両者が互に難じあふのではなく、又これらの外に二三の「純粹」な人々があつて、日和見的敗北的偏向や或は政治主義的宗派主義を克服するといふやうなものではなく、実に七百のわが同盟員全体が「^{☆18}拡中」において、こゝに提出された方針の検討協議に参加し、之を自己の鉄則としての新しい方針となし、各自がその実行に着手することによつてのみ、ひとりこれによつてのみ各自の内部における一切の消極的傾向の克服が成され、ひいて、運動全体の現在の日和見主義的・敗北的傾向の桎梏がとり外されるのである。

(一九三四、一)

注

☆1 作家同盟

日本プロレタリア作家同盟(作同、NALP、ナルプ)。一九二九年二月十日結成。もと全日本無産者芸術連盟(ナツプ)文学部。全日本無産者芸術団体協議会(ナツプ)に加盟。機関誌『戦旗』のち『ナツプ』。三十二年十一月、日本プロレタリア文化連盟(コップ)に加盟。『文学新聞』(三十二年十月十日～三三年十月三日)、『プロレタリア文学』(三三年一月～三三年十月)を発行。三三年二月、国際革命作家同盟(モルプ)に加盟。三四年二月二十二日、貴司山治留守宅での拡大中央委員会で解散決定。(村田)

☆2 敗北主義の理論

敗北主義、右翼日和見主義などの語は、『文芸戦線』グループや、徳永直・貴司山治ら大衆小説的傾向の強い作家に対し繰りかえし用いられた。ここで直接には林房雄とその同調者たちの主張をさす。一九三二年四月に出獄した林は、小林多喜二、宮本顕治ら地下指導部の政治主義に反対して作家の「守護者」となることを表明。多くの支持を集めた。指導部は、林を「右翼的危険」「日和見主義」とし、それに理解を示す者を「調停派」として厳しく批判した。ただし後段で貴司は、政治的な「指導」のあり方も「裁断的批評」と批判している。(村田)

☆3 治安維持法の「改正」案

奥平康弘『治安維持法小史』(一九七七、二〇〇六)によれば「政府内部での治安維持法改正への取組みは、三三年春から秋にかけておこなわれ、その年の終りころには改正案の成案をえて、翌三四年はじめに全面改正案が、第六五議会に提出されるという経過をたどった。けれども「略」審議未了、廃案となった」。この改正案には「予防拘禁」制度や、ナルプなどの「外郭団体」取締を可能とする改訂が含まれていた。三六年の思想犯保護観察法、四一年の治安維持法改正へとつながる。(村田)

☆4 街頭組織

作家と読者が主として機関誌の販売・講読の商業的關係によつて接続するナツプ時代の芸術運動形態をさす。コップ加盟前の古川莊一郎(蔵原惟人)「プロレタリア芸術運動の組織問題」(『ナツプ』一九三二年六月)のなかに、「ナツプを現在のままの街頭的な非労働者的な組織として残しておこう、という日和見主義が隠されているのを発見する」とある。『ナツプ』三一年十一月号は、廃刊に際し、コップ加盟の各団体が「自己の組織を広範な勤労大衆の基礎の上に再編成し、工場、農村、街頭等にそれぞれのサークルを組織」しつとあると述べている。(村田)

☆5 日和見主義的右翼的傾向の公然たる結集

常任中央委員会「右翼的偏向との闘争に関する決議」(『プロレタリア文学』一九三三年四月・五月合併号)に、「同志林房雄は、自己の右翼的逸脱を擁護するために、自己及び同傾向の同志を自ら「同伴者」と規定し、運動のボルシェヴィキ的方向を拒否する口実にし、我が同盟内に「同伴者」群の名による右翼的日和見主義的グループの公然たる安全地帯を設けんとしている。同志林房雄は、かかるグループの糾合の思想的準備を公然と開始している。(改造二月号)」とある。林房雄は「文芸時評」(『改造』三三年二月)で、「いまは、作家が腹をたてるときです」としていた。(村田)

☆6 大衆的カンパニアの組織

カンパニア。ロシア語「кампания」。政治的・社会的目的のためにおこなわれる「運動」。とくに大衆に訴えての目的実現のための行動。狭義には資金集め(カンパ)。「プロレタリア文学」一九三二年六月臨時増刊号掲載の作同第五回大会決議に、「我々は、一九三二年に於て、カンパニアに

対して創作活動による強力な参加をなさねばならない。カンパニアに際して、手軽に製作され持込まれ易い壁小説の形式のみならず、すべての可能な形態が此の場合駆使されることが望ましい」とある。(村田)

☆7 二年前の方向転換

ナップからコップへの改組を含めた一連の運動方針の方向転換をさす。一九三〇年八月に開催されたプロフィンテルン(＝コミンテルン指導下の国際労働組合)第五回大会に出席した蔵原惟人が、前掲(注4)「プロレタリア芸術運動の組織問題」(三二年六月)で、経営内組織活動の必要を提唱。以降、その主張に沿ってナップ内で運動方針の議論が展開され、同年十二月の改組に至った。(和田)

☆8 「プロレタリアリズム」が「唯物弁証法的創作方法」のスローガに改められた

蔵原惟人は「プロレタリア・レアリズムへの道」(『戦旗』創刊号、一九二八年五月)において、過去のブルジョア・リアリズムや小ブルジョア・リアリズムを批判し、「階級的観点を獲得」したリアリズムを主張した。この「プロレタリア・リアリズム」は、作家同盟の創作理論として長く定着したが、同じく蔵原が谷本清という匿名で発表した「芸術的方法についての感想」(『ナップ』一九三一年九月、十月)において「唯物弁証法的創作方法」を提唱すると、前者の理論は発展的に解消された。(和田)

☆9 文学に対する政治の優位性

蔵原惟人「『ナップ』芸術家の新しい任務」(『戦旗』一九三〇年四月)における「わが国のプロレタリアートとその党とが現在に於いて当面している課題を、自らの芸術的活動の課題とすること」という言葉が示すように、文学を政治に従属させること。「政治の優位性」は、作品内容のみならず、文学活動に対する政治活動の優位性も含み、三二年十二月のコップ結成以降、芸術団体であるはずの組織は共産党の外郭団体と化し、成員の作家たちは政治的な組織活動を余儀なくされた。なお、これに関する貴司の立場は、「貴司山治日記」三四年三月二十六日の項(関西大学『国文学』二〇〇〇年十一月)で詳しく述べられている。(和田)

☆10 文学における党派性の確立

レーニンの「文学(芸術)は党のものとならなければならない」という

言葉に依拠しており、共産主義を標榜するナップ派の文学が、社会民主主義的な『文芸戦線』派の文学と明確な違いを示す必要性から生じた。特に、一九三〇年四月の作家同盟第二回大会で「文学運動のポリシェヴィーキ化」のスローガンが採用されて以降、「ブルジョア出版に対する我々の態度はかうでなければならぬ」(『戦旗』三〇年六月)や「芸術大衆化に関する決議」(『戦旗』三〇年七月)などを経て党派性は強化されていった。(和田)

☆11 主題の積極性

谷本清(蔵原惟人)「芸術的方法についての感想」(『ナップ』一九三一年九月、十月)参照。プロレタリア文学が「何を」描くべきかという問題に関して、蔵原は「何を」を切離されたものとしてではなくて、全体の一部として理解すること、及びこの問題を『如何』にといふ問題と結びつけて『何を如何に』描くかといふ風に問題を提出することが必要であり、それは「抽象化された個々の『題材』の問題ではなくて、全体の一部としての作品の中心的題材とそれに対する作家の見方をも含む所の主題(テーマ)の問題」であるとした。(和田)

☆12 社会主義リアリズム

一九三二年にソ連共産党中央委員会で提唱され、三四年の第一回ソ連作家同盟大会で公認された芸術理論。「現実を革命的発展において、真実に、歴史的具體性をもって描くこと」を基本概念とし、社会主義革命達成後のソ連における労働者の思想教育を目的としている。日本では三三年以降、雑誌『文化集団』を中心にその理論が積極的に紹介され、唯物弁証法的創作方法に懐疑的であった作家たちに歓迎された。(和田)

☆13 エンゲルスのハークネスにあてた手紙

一八八八年、エンゲルスが作家マーガレット・ハークネス(筆名ジョン・ロー)の『都会の娘』に対する感想を送った手紙のこと。エンゲルスによる簡潔なリアリズムに関する記述とバルザック評価とを含むことで、しばしば言及される。本文中にいう「正しいリアリズム」とは、「リアリズムとは、私の考えでは、細部の真実さのほかに、典型的な状況のもとでの典型的性格の忠実な再現という意味を持っています。」という部分を参照していると考えられる。また同手紙の中には「作者の見解がかくされて

いれはいるほど、それだけ芸術作品にとつてはよいのです」という記述もみられる。「エンゲルスからマーガレット・ハークネス（在ロンドン）へ」『マルクス・エンゲルス全集』第三七巻、三五〇四頁（原著四二〇四四頁）、大月書店、一九七五年。当時、菊盛英史訳「エンゲルスの未発表書簡（バルザックとリアリズム）」（『思想』一九三二年七月）、エフ・シルレル著、上田進訳「エンゲルスの未発表の手紙について」（『思想』三二年八月、九月号）で紹介され、林房雄らに取り上げたことからさかんに論じられた。（安岡）

☆14 われ／＼は以前に農民文学はプロレタリア文学の一種類であると唱えたことがある

たとえば、小林多喜二「文藝時評 時々、肩を聳やかして！」（『中央公論』一九三一年五月）を参照。「われわれが「農民文学」と云ふときには、それはあくまでも、プロレタリアートの観点から農民を取扱った作品といふ意味であつて、プロレタリア文学以外の何ものでもないのだ。たゞ、都市のプロレタリアートを取扱ふ作品に対して、便宜上農民文学と云つてゐるに過ぎない。」（安岡）

☆15 大衆文学の提唱として何度か持出され、その都度、誤謬が批判されて終つてゐる

貴司山治自身や徳永直らによる芸術大衆化論。（↓本誌和田論文参照）
☆16 いくつかの傾向を同じくするグループへの分裂として提出してゐる同志もある。

林房雄「プロレタリア文学再出発の方法」（『文化集団』一九三三年十一月）に、「作家同盟は、今、分裂すべきである」とある。また、「現在の同盟の内部には、すでに、いくつかの傾向が生まれてゐる。〔略〕この諸傾向を、大衆の面前でお互にたゝかわせ、作家活動の実際を通じて黒白をさだめなければならぬ」としており、これを意識していたと思われる。（池田）

☆17 同伴者

同伴者、同行者、道連れ。ロシア語「Политик」。偶然の（汽車に乗り合わせたような）同行を意味する。トロツキイ『文学と革命』（一九二三年、茂森唯士訳・一九二五年）では、クリューエフ、エセーニンら、革命

を全体として把握していないが、革命なしに生まれなかつた者たちのこと。農民への期待を強くもつ彼らの文学は「一種の新しいソヴェエト式ナロードニキ主義」（岩波文庫版）とある。蔵原惟人「無産階級芸術運動の新段階」（『前衛』一九二八年一月）は、「動揺する小ブルジョア芸術家はその社会的位置によつて、時には革命的傾向さへ持つ。我々はこの傾向を助成し、それを利用して、そして次第に彼等をプロレタリア解放運動の「同伴者」たらしめるべく努力しなければならない」と取り上げた。ここでは、革命運動の主流とならないまでも、その重要性を認識し、支持する一連の作家群の意。日本での用法は主としてこの理解。（鳥木）

☆18 拡中

拡大中央委員会の略。委員会に常任委員以外のメンバーを加えて開かれたもの。鹿地亘の回想によると、委員会において一九三四年二月上旬に運動の方向転換を決めるための拡大中央委員会を召集することがとりきめられた。当時の事情ではそれ以上の規模の集會を開くのが難しいため、大会ではなく拡大中央委員会という形になったという（『自伝的な文学史』一九五九年）。貴司山治は一九三四年一月から中央常任委員会に参加していたが、一月三〇日に検挙されたため、この拡大中央委員会には参加できなかった。ここで日本プロレタリア作家同盟の解散が決定した。（池田）

校注（原稿（本翻刻）↓「浄書稿」）

- *1 プロレタリア文化運動↓プロレタリア文学運動（浄）
- *2 プロレタリア文学は↓プロレタリア文学運動は（浄）
- *3 大衆的カンパニアの組織↓カンパニアの組織（浄）
- *4 方針↓方法（浄）
- *5 スローガンの採用において↓スローガンにおいて（浄）
- *6 直接、不妥当に結びつけた↓直接結びつけた（浄）
- *7 裁断的批評↓裁断批評（浄）
- *8 創造物↓創作物（浄）
- *9 その方法↓その方法（浄）
- *10 意味しはしない↓意味しない（浄）
- *11 成長↓成上（浄）

- * 12 に分け、サークルにおける作家の任務↓「脱落」(浄)
- * 13 労働者の団結↓ 団結(浄)
- * 14 斗争を組織する任務↓ 斗争をする任務(浄)
- * 15 これによつて↓ それによつて(浄)
- * 16 自己訓練↓ 自己の訓練(浄)
- * 17 新段階↓ 新しい段階(浄)

* 18 われくくの↓ 一層われくくの(浄)

池田啓悟 鳥木圭太 村田裕和 安岡健一 和田 崇	本学大学院博士後期課程 本学大学院博士後期課程 本学文学部助教 日本学術振興会特別研究員 本学大学院博士後期課程
--------------------------------------	--